

## エビデンスに基づく教育

### ～教育相談を中心に実践研究政策の三位一体の価値を考える～

企画者：森俊郎(岐阜県養老町立東部中学校) 司会：中井俊之(広島県広島市立福木小学校)

話題提供者：山田洋平(福岡教育大学) 岩崎久美子(国立教育政策研究所)

コメンテーター：荒川裕美(文部科学省初等中等教育局国際教育課)

指定討論者：草野剛(岐阜県垂井町立表佐小学校)

#### 企画趣旨

「これまでやってきた指導をあえてかえる必要はない」「経験豊かな教師が言ったことにはすべて従い、口出ししない」「教師は1日24時間、365日働き続けて当たり前」。そんな言葉を耳にした事はないだろうか。「教師に求められるのは勘や経験が全てである。」「懸命に指導すれば必ず子どもは伸びる」そんな言葉を耳にした事はないだろうか。

近年、海外(例えば、イギリスのEvidence for Policy and Practice Information and Cooperation Centre:EPPI-CentreやアメリカのWhat Works Clearinghouse:WWC)では、教育現場で科学的根拠のある実践を行うべきである「エビデンスに基づく(Evidence Based)」という考え方が広がりつつある。

「エビデンス」とは、「科学的根拠」や「検証結果」という意味で用いられている。

本シンポジウムでは、学校現場におけるエビデンスベースの可能性を議論する。とくに教育相談分野を取り扱う。それらを通じて、エビデンスに基づく教育において、実践・研究・政策の三位一体の取り組みの必要性と展望を考察したい。そのため、それぞれの立場に所属する者が登壇し議論することとする。

#### 登壇者

テーマ「学校現場におけるエビデンスに基づく教育とは」

岐阜県養老町立東部中学校 森 俊郎

毎日、子どもを目の前にしている。子どものために価値ある教育実践を積み重ねたいと思っている。しかし、疑問に思うことがある。今の自分の授業なり指導なりは本当に子どものためになったのだろうか、自分が良かれと思ってやっていることは、もしかしたら子どものためになってはいないのではないだろうか、本当に、自分のしたことは最善だったのだろうか。

そんな思いは自分だけではなかった。同じ思いを持った仲

間とともに、Evidence Based Education 研究会を立ち上げ、「エビデンスに基づく教育実践」の具体を目指してきた。

とくに多忙な日本の学校現場において、エビデンスに基づく教育は大事ではあるが、実際にできるだろうかという点について試行してきた。その中で、学校現場における「エビデンスに基づく教育」について、いくつかの良さや課題が明らかになってきた。

当日は、これまで積み重ねてきた具体的な教育実践をもとに、学校現場における「エビデンスに基づく教育」とは何かを提案したい。

結論から申し上げれば、エビデンスに基づく教育実践は「実証的エビデンス」「場」「価値」を統合したもの(EBMの定義:2000より)であり、その過程には実践者・研究者・行政の連携が必要であること、エビデンスベースドを捉える視点として、エビデンスの「種類」(Nutley et al:2007)・「グレード」・「お薦め度」(GRADE:2004)が重要であることを提案したい。

テーマ「教育相談におけるエビデンスの活用とは」

国立教育政策研究所 岩崎久美子

次の2つの観点から教育相談におけるエビデンス活用の可能性を考えたい。

#### 1. 効用最大化(満足化)のための判断材料

エビデンスに基づく教育とは、医療の定義を援用すれば、「当事者の意志を決定するために、最新かつ最良の根拠を一貫性を持って、明示的な態度で、思慮深く用いること」(Sackettら)である。実証的裏づけによる教育判断が教育相談や政策の場面で有効か、教育判断にナラティブに基づく質的情報とエビデンスをどのように組み合わせることが臨床科学として有益かを検討する。

#### 2. 蓄積された専門的経験や知識を明示的に伝達する方法

教育相談では、一般には、個別課題をめぐり児童・生徒や保護者などの当事者の語りと対応者との対話（ナラティブ）に依拠して相互作用的に課題の解決が図られる。その解決は、当事者の心理的なゆらぎ、時間の流れ、関係性など状況に依存し、また教師などの対応者の技能や経験に左右される傾向がある。対応者の相談能力を標準化し、その評価を明示するために、エビデンスとしての量的指標を用い技能や経験を科学的知として伝達する可能性を探る。

テーマ「学校現場におけるエビデンスに基づく教育の可能性」  
岐阜県垂井町立表佐小学校 草野剛  
学校現場におけるエビデンスに基づく教育導入の可能性について以下の観点から言及したい。

1. 今までベテランの先生方が経験や勤によって培ってきた様々な支援もエビデンスに基づく教育の視点から説明ができること。
2. 経験則で行われてきた児童生徒への支援法がエビデンスに基づく教育を用いて整理することによって、科学的にベテラン教師から若手教師へと伝承されること。
3. 研究職や行政職の方々とエビデンスに基づく教育について共同研究を進めることで、エビデンスに基づく教育の有用性を広く関係者に発信することができること。
4. 研究職や行政職の方々と共同研究を進めることで、現場の教師がいわば「お墨付き」を得た形で積極的にエビデンスに基づく教育に取り組めること。まだまだ教育現場では EBE という言葉が浸透しているとはいえないが、本シンポジウムを通して、エビデンスに基づく教育が教育に携わる者にとっての「合い言葉」となることを期待している。

テーマ「エビデンスに基づく教育を目指す実践者と研究者の連携について」

福岡教育大学 山田洋平

日々学校現場で子どもたちと関わっている教育実践者は、子どもたちが抱える課題、また課題に対する有効な関わり方についての多くの知識と経験を有している。一方、学校現場で抱える様々な課題に対して研究する研究者は、多くの理論や科学的知見を有している。彼らはともに、「子どもたちに良い教育を提供したい」という志を持って、各々の役割を果たしている。この教育実践の視点と研究的な視点から、1つの課題について議論することで、科学的な根拠があり、実践で活用できる有効な解決策を導き出すことができる。

そのため、エビデンスに基づく教育において、教育実践者と研究者の連携は不可欠であると考えられる。しかし、同じ志を持っていても、両者の連携は難しく、ともにWin-Winの関係を構築することは容易ではない。

を構築することは容易ではない。

話題提供者は、これまで実践協力という形で学校現場と多く関わってきた。そこで、これらの経験をもとに、研究者の立場から教育実践者と研究者との連携における課題と可能性について話題提供し、教育実践者と研究者との連携の在り方について議論したい。

テーマ「本シンポジウムの進行について」

広島県広島市福木小学校 中井 俊之

本シンポジウムにおいては、実践者・研究者・教育行政の関係者が一同に介し、教育相談分野における「エビデンス」の在り方、活用の仕方、伝え方について論じていくことが目標である。

教育の領域で「エビデンス」という言葉は、もはや取り立てて新たな用語ではなくなってきている。様々な立場で、「エビデンス」の重要性が叫ばれている。しかしながら、「エビデンス」と一口に言っても、その意味するところは、さまざまである。「エビデンス」が、単に数値として表されたデータを表すことなのか、質的なデータなのかは、それを主張する人々によって、捉え方、用い方が異なる。

私たちは、「エビデンス」を単に、データの集まりではなく、現在の教育をよりよくしていくものとしてとらえている。私たちは、「エビデンス」を“つくる”、“伝える”、“使う”という側面からとらえ、実践をよりよくしていくために、現在、多様に捉えられ、用いられつつある「教育におけるエビデンス」を詳細に定義し、今後の「エビデンスに基づく教育」について方向づけを行っていきたいと考える。

本シンポジウムでは、実践・研究・行政の関係者による異質なグループを組み、ワークショップ形式で、実際の課題について話し合い、エビデンスに基づく教育について、理解を深め、共通の認識を持つようにしたい。ぜひ多くの方々のご参加を願う。

コメンテーター

文部科学省初等中等教育局国際教育課

荒川 裕美

キーワード エビデンス エビデンスに基づく教育  
Evidence Based Education